保育・教職実践演習の授業の実際と課題

Practical lessons and issues of childcare/teaching practice seminars

（2023年３月31日受理）

大　橋　美佐子
Misako Ohashi

Key words：ロールプレイング，グループ討議，模擬保育

要　　旨

平成22年度入学生から導入された「保育・教職実践演習（幼稚園）」の授業を実際に実践した。そこでの学生の学びと課題について考察した。国から出された教職実践演習の趣旨・ねらいについて，実際に実施した授業がリンクしているのかどうか検証した。その中で最近の学生の特徴として，コミュニケーションがうまく取れない，人間関係がうまくいかないなどの問題が出てきた。それを克服するために，ロールプレイングやグループ討議を取り入れた授業をする。それが，教育，保育活動の学びの集大成としての教科目として，趣旨やねらいに近づけるよう教育を行い，教職生活にスムーズに入れるよう実施しなければならない。その先にある離職率が下がることへも期待する。

は　じ　め　に

「保育・教職実践演習（幼稚園）」は，保育者養成課程において保育士資格・幼稚園教諭免許の取得に関して必要不可欠の授業である。この授業は，「教員として最小限必要な資質能力として有機的に統合され，形成されたかについて，最終的に確認するものである」と文部科学省の教職実践演習の科目の趣旨･ねらいに記されている。この授業では，すべての実習終了後に行う授業として取り入れられたものである。また，「学生はこの科目の履修を通じて，将来，教員になる上で，自己にとって何が課題であるのかを自覚し，必要に応じて不足している知識や技能等を補い，その定着を図ることにより，教職生活をより円滑にスタートできるようになることが期待される」とある。さらに，教員として求められる４つの事項が「１．使命感や責任感,教育的愛情等に関する事項，２．社会性や対人関係能力に関する事項，３．幼児児童生徒理解や学級経営等に関する事項，４．教科・保育内容等の指導力に関する事項，また，本科目の企画，立案，実施に当たっては，常に学校現場や教育委員会との緊密な連携・協力に留意することが必要である」と記されており，この事項については，授業内容に組み込んでいく必要がある。そこで，本学の「保育・教職実践演習（幼稚園）」の授業の工夫や授業内容について考え実施し，課題を考察していった。

１．保育・教職実践演習（幼稚園）の授業概要

１）授業の概要

授業科目名：保育・教職実践演習（幼稚園）
対象学年：保育学科２年生
　　３グループに分けて１グループ
　　（23名～24名）
開講時期：２年生後期すべての実習終了後に実施
授業概要：２年間にわたる専門的な履修科目や実習等を通して，学生が修得してきた知識・技能を点検するとと

もに，不足している知識・技能を補完・向上させ，保育・教育現場で生きて働く知識や技能を身につける。

2）到達目標

1．保育者としての使命感や責任感をもつことができる。
2．保育者に必要な専門的知識をもつことができる。
3．保育を取り巻く環境の変化について理解し，実践的に保育に生かすことができる。
4．仲間と協力して模擬保育を実施する協働性を理解し，実行できる。

なお，本科目はディプロマポリシーにあげた学士力のうち，＜知識・理解＞＜思考・問題解決能力＞＜技能＞＜態度＞の修得に貢献する。

3）授業計画

保育・教職実践演習授業計画（表１）

第１回	オリエンテーション
第２回	現代の乳幼児保育の課題　（グループ討議）
第３回	災害時の対応
第４回	災害時の対応（模擬保育・避難訓練）
第５回	保育現場における安全計画　（グループ討議）
第６回	保育者の役割
第７回	保育者としての役割と課題（ロールプレイング）
第８回	幼稚園実習のレポートから見えてくる課題（グループ討議）
第９回	幼稚園・保育所・こども園から小学校へのスムーズな移行
第10回	地域連携のあり方を考える（１）
第11回	地域連携のあり方を考える（２）（グループ討議）
第12回	保護者支援の実際
第13回	保護者支援のあり方と課題　（ロールプレイング）
第14回	小学校との連携（１）ＤＶＤ視聴
第15回	小学校との連携（２）

教員３名で実践した授業計画である。この授業では，教員からの一方的な授業ではなく，ロールプレイングやグループ討議，模擬保育等が求められている授業である。この授業計画においては，本学科のディプロマポリシーの中の＜知識・理解＞＜思考・問題解決能力＞＜技能＞＜態度＞の修得を目指し，３名の教員がそれぞれに授業計画を立て，工夫し授業を進めていった。

4）授業の実際

第１回目の授業において，オリエンテーションを行い，次の事を伝える。毎回の出席と毎回のレポートを課題とすること。また，授業の形態がロールプレイングやグループ討議，模擬保育などを実施するため積極的に参加し，相手の気持ちになることや保護者の気持ち，子どもを理解することなどを伝えた。

第２回目では，幼稚園や保育所，施設の実習先での乳幼児の姿，保育の実態や現状をそれぞれグループで討議し，その後グループ毎に発表をする形式をとった。その回のレポートにおいては，「実際に実習をした保育所ではないが，自分も同じように実習をしたので，友達が発表する状況がよくわかった」「グループの友達も同じような経験をしていることがわかった」等の記述があり，グループでの討議や発表が学生たちそれぞれの疑似体験となったことがわかる。これはグループ討議に属する。

第３回目の災害時の対応については，東日本大震災のDVDを視聴し，感想やその状況に置かれた場合に自分はどのような行動をすると思うかなどを話し合った。また，西日本豪雨を実際に体験した学生もおり，その時のすさまじさや避難経験等も話したり聞いたりする機会となった。また，その時の映像をDVDで視聴しレポートを書いた。これこそ，他者の気持ちになることやその時の緊迫した状況下での避難や思いに触れる機会となった。身近な友達が災害に遭っていたことを知り，驚きと同時によく無事でいられてよかったという気持ちもわいた様子であった。これはグループ討議に属する。

第４回目では，避難訓練の模擬保育を行った。事前に話し合いを行い，実際に保育士役，子ども役を自分たちで決め，実際に避難訓練の模擬保育を行った。１グループを２つに分けて行い，お互いに模擬保育を見合い意見交換をした。そこでは保育士役になった学生は，それぞれに「緊張した」とか「言葉がけや動きを決めていたが，一瞬頭が真っ白になりどのように行動するか迷った」などの意見があった。また，子ども役も室外に避難するが，「非難するときの約束を忘れてしまって，うまく非難できなかった」等の記述があった。訓練だということを知ったうえでの模擬保育であったが，いざというときには落ち着いて行動ができないということを経験した様子であった。このことから，日ごろから繰り返し訓練を

することの意味や必要性を理解することができた授業になった。これはグループ討議及び模擬授業に属する。

第７回目では，保育者役と保護者役，子ども役と入れ替わりながら，実際にあった事例に基づいてロールプレイングを行った。最初はその役になり切れていない学生がほとんどであったため，この時保育者はどのような気持ちでこの言葉を保護者に伝えたと思うか，保護者は保育者の言葉を聞いてどのような感情が芽生えたと思うかなど，少し丁寧に説明をしながら実際に場面を演じるよう伝えた。その時のレポートには「相手がどのような気持ちで伝えているのか，その言葉をどのような感情で受け取るのかがわかった気がした。これから保護者に対して子どもの状況を伝えていかなければならないが，常に保護者がどのように受け取るかを考えて伝えようと思う」「今まで子どもに対して何気なく言葉がけをしていたが，この子どもは今どのような気持ちで聞いているのかを考えながら言葉がけをしていきたい」「実習で保育者が言葉がけをしていた言葉を思い出して，納得できた」などその他同じような意見や感想が多く見られた。これはロールプレイングとグループ討議に属する。

第８回目は最後に行った幼稚園教育実習の報告会のレポートを基にディスカッションを行った。３名のレポートをプリントにしたものをしっかりと読み返す作業から始めた。そこで，特に気になる部分を指摘し，その時の状況や保育者の思い，子どもの感情をグループの中で話し合った。発表をする中で，「今までレポートのプリントをもらって，さらっと読むだけだったが，じっくり読んでいくと，いろいろなことがわかってくることがわかった」「こんなに一生懸命読んだことはないので，しっかり読まなければわからないこともあるということがわかった」など，当たり前のことであるが今更感じたようである。これは事例研究及びグループ討議に属する。

第９回目では，幼稚園，保育所，こども園から小学校へのスムーズな移行という授業の中で，小１プロブレムの話，スタートカリキュラム，アプローチカリキュラム等現代の課題に関する話を盛り込みながら授業を進めていった。この回では，小１プロブレムという言葉自体知らない学生もおり，どのような状況の事を小１プロブレムというのかを話すうちに小学校の時にそこまでひどくはないが，多少の経験をした学生もいたようである。学生に意見を聞いていくと，「幼稚園，保育所，こども園からは必ず小学校に進学することがわかっているため，それなりの準備をしなければならないことがわかった」「スムーズに小学校に進学するために，保育者は努力しなければならないことがわかったので，しっかりと保育をしようと思う」などの意見が聞かれた。

第13回目は保護者支援のあり方と課題という授業を行った。ここでは，様々な子どもがいるように，保護者もさまざまであること，また，最近ではモンスターペアレンツと呼ばれる保護者もいるが，なぜそのような行動にでてしまうのか等をグループで考えるようにした。意見として「自分の子どもが可愛いがゆえに保育者に強く出てしまうということもあるのではないか」という意見や「何に対してもクレームを言いたい人なのではないか」などの意見が出た。様々な保護者に対する対処の仕方は，それぞれ変わってくるが，保護者としっかりと話をすること，まず新任の時には一人で対処するのではなく，主任や園長に一緒に話に入ってもらい話を進めていくこともあるということを伝えた。学生は，保護者対応をことのほか恐れている感があるため，少しでも負担を軽減する必要がある。これは，グループ討議に属する。

第14回目の小学校との連携では，大学の近くにある小学校と普段から連携をしている。３年前から，幼稚園，保育所，こども園を卒園した後どのような小学校生活を送っているのか，小学校１年生を見学に行くという計画を立てたが，丁度コロナ感染が広がり計画のみで終わってしまった。そこで，見学には行けないが，１年生の担任の先生に対して事前に学生から質問を集め，ビデオで回答してもらうという方法をとった。また，小学校１年生の授業風景を撮影してくれて，先生の動きや子どもが手を挙げて発言したり，先生とのやりとりなどの映像を撮ってもらった画像を授業で流し視聴したりした後に学生の感想を聞いた。まずは，未知の世界である小学校１年生の先生が自分たちが質問したことに対して回答してくれたことを非常に喜んでいる姿があった。レポートには「本当に小さな意味もないような質問に対して，真剣にちゃんと答えてくれていて感動した」「子どもって一年ですごく成長するのがわかった」「先生たちがすごいと思うし，こんな先生方だったら子どもたちを安心して進学させられると思った」などの記述がみられた。これ

らのことから，時間が合えば小学校の先生に来学していただき，直接話をしていただくことは，自分たちが保育した子どもたちがどのように小学校に上がり，生活の中でどのような困難があるのかなどを知る良い機会になることと考えられる。これは現地調査に属するが，本来の現地調査ではないため，今後も計画を立て実施できるようにしたい。

第15回目のまとめでの最後のレポートについては,「すでに授業で習った事だったが，忘れていることもあり，これから就職をするまでにもう一度復習をしなければならないと感じた」とか「改めて，保育者の仕事の多さや大変さがわかった。だけど,頑張っていこうと思う」「今回経験したことを生かして,現場で使っていこうと思う」など前向きな意見が多かった。また，最後に「履修カルテ」の記入を行った。その時に学生が話していることの中に「１年生の時に書いていることが幼稚に見える」「全然わかってない時に書いているので，なんだか恥ずかしい」「もっともっと大変なのはわかっているから，がんばろう」など様々な言葉を聞くことができた。

実際に授業をしていくうえで，すべての実習を終了していると，教員が話す内容を十分把握できていると感じることができる。学生にとっても理解が早く,双方にとって非常にやりがいのあるよい授業である。また，毎回のレポートも感想ではなく，考察もできており，本学科が掲げているディプロマポリシーの中の＜知識・理解＞＜思考・問題解決能力＞＜技能＞＜態度＞の修得はできたのではないかと考えられる。

２．考 察 と 課 題

１）文部科学省の教職実践演習について

平成22年度入学生から導入された「保育・教職実践演習（幼稚園）」の授業は，大学の最終学年において実施されるものである。そのねらいは文部科学省から「学びの軌跡の集大成と位置付けられている」とされているように，大学においてそのねらいを達成できるよう努力をしなければならない。また，この授業の特徴であるロールプレイング，グループ討議，模擬保育などを取り入れた授業を行うことを推奨している。さらに学校現場や保育現場と連携を取りながら進めていく授業であるということも記されている。

文部科学省の「教職実践演習について」の「３．到達目標及び目標達成の確認指標例」をみると，保育士養成校においてハードルが高い項目が見受けられる。果たして，どれくらいの項目が到達目標に達するのだろうかと疑問に感じるものもある。例えば1.使命感や責任感，教育的愛情等に関する事項の目標達成の確認指標例をみると「〇誠実，公平かつ責任感を持って子どもに接し，子どもから学び，共に成長しようとする意識をもって，指導に当たることができるか。」という項目に関して，その指標に対する評価をどの時点で，どのような基準をもって評価するのがよいかということが不明瞭である。また，２．社会性や対人関係能力に関する事項では「〇学校組織の一員として，独善的にならず，協調性や柔軟性をもって，校務の運営に当たることができるか。」などは，実際に現場に出てからの評価になってくる。したがって，保育士養成校においては限界があるものと思われる。そのようにみていくと，それぞれ高いハードルである事項や現場に出てからの評価になるものなどが多く設定されている。これがすべてではないものの，保育士養成校側としてはすべての事項がクリアできるものではない。

本学科で実施した「保育・教職実践演習（幼稚園）」では，グループ討議や模擬保育，ロールプレイング等の授業を行ってきた。これらの授業では役割になり切ってのその場面は演じることができるが,模倣でしかない。実際に，子どもがその場面で発するであろう言葉や，行動は推測でしかなく，実際の保育現場においては対応策が定かではない。一方で，実際の保育現場においても，子ども達は様々で，どのような行動や言葉が出てくるのかは想像ができかねることもある。今後，この授業においては，すべての実習終了後に行われるため，現場の子ども達の言葉を思い出しながら，模擬保育を実施するように指導しなければならないと感じる。

２）人間関係構築の困難さ

前述したように，保護者対応についての困難さを感じている学生が多いことから，なぜ，そのような現実があるのかを考えると，人間関係がうまく作れない年代ではないかという疑問が出てくる。人と人とのコミュニケー

ションがとりにくい状況があるということで，森光ら（2012）は，社会の変化とりわけ家電製品の普及から便利な社会になった。したがって，家族の家事労働分担や地域における協力作業，すなわちボランティア活動の機会が少なくなったことから園や学校にあって保育者や教師が保護者と適切な距離を保つことができにくい状況を作りだしているのではないかと述べている。また上田ら（2015）は，保育者の離職理由として「職場の人間関係」が大きな要因とされていると記述されているように，現代の若者と呼ばれる者たちが，人間関係に困難さをもっていることがわかる。そもそも人間関係については森光ら（2012）がいうように，家庭内や地域の中で育まれてきたものである。その家庭内や地域での教育がなされないとなると，これらを保育者養成校が，保育・教職実践演習（幼稚園）の授業の中のみで教育しようとすると限界がある。

では，人間関係の構築やコミュニケーションの取り方についてどのように授業に組み込んでいくかというと，保育・教職実践演習（幼稚園）のロールプレイングやグループ討議，その中での発表などが有効であると考えられる。限界はあるもののできるだけ回数を増やし，慣れていくしか方法はないものと考える。他にも，日々の学生生活の中で，教員が学生に対して挨拶や声掛けを行うなど，できるだけ会話や応対をするような場面づくりをしていかなければならないのではないかと考える。

3．ま　と　め

保育・教職実践演習（幼稚園）の授業について考察してきたが，国が示した科目の趣旨・ねらい「到達目標及び目標達成の確認指標」を見ると，保育士養成校のみでは到達できかねるような目標設定がされているのではないかと思われる。しかしこの保育・教職実践演習（幼稚園）の授業科目は，保育士養成校で学修したことのみではなく，実際に教育・保育現場での実習を終えたのちに行われる科目であるため，学びの集大成としての教科目として，国が示す趣旨やねらいに近づけるよう教育を行い，教職生活にスムーズに入れるよう実施しなければならない。また，その先にある離職率が下がることへも期待するためにもこの教科目を充実したものにしなければならない。

現在新型コロナ感染症が５類になり，人々の生活がコロナ感染症以前に戻りつつある状態である。今回筆者たちが行った授業を改善するならば，実際に小学校に訪問し，保育所や幼稚園，こども園で生活をしていた子どもたちがどのように，小学校で授業を受け，どのような人間関係をつくり，生活をしているのかを自分たちの目で確認することを組み込んでいきたいと考えている。また，小学校の先生から子どもたちの実態を話してもらい，よりリアルな子どもたちの実態を感じられるようにしたい。

社会全体が変化する中での保育士養成は，困難な時代に入っていると考えられる。今後養成校として質の高い保育士を育てていかなければならないという使命がある。小倉ら（2009）は保育所・幼稚園・施設の保育現場にアンケート用紙を送付し，回収した結果を分析している。その結果を「教育・保育理論に関する知識」と「実技に関する知識・技術」に分類してまとめている。保育現場からの記述には，「まずは，各年齢の発達段階を十分に把握して実習に臨んでほしい」や「一般常識や社会的マナーに関することを身に着けてきてほしい」などがあったと報告されている。そのアンケート調査から15年あまりが経っている。現在の保育現場が保育士養成校に対してどのようなことを求めているのか，再度アンケート調査をしてみたいと考える。そうすることにより，現在行っている保育・教職実践演習（幼稚園）での授業内容に反映できる内容が出てくるのではないだろうか。

今後，授業をする中で科目の内容しかり，一般常識や社会的マナーも指導するとなると，入学の時から卒業まで日常生活の中で常に指導する必要がある。ただ一つの教科目のみで身につけることは不可能である。

参　考　文　献

森光義昭・関総　2012
「保育・教職実践演習（幼稚園）の授業展開と課題」久留米信愛女学院短期大学研究紀要　第35号　p. 56 ～ p. 66
文部科学省H.P　教職実践演習（仮称）について
文部科学省H.P　1. 教職課程の質的水準の向上

小倉毅・大橋美佐子・小野順子　2009
「保育士養成における望ましい学びの過程（1）―現場アンケートから―
全国保育士養成協議会第48回研究大会
上田厚作　松本昌治　2015
保育・教職実践演習に求められる教育内容と課題
－新任保育者に求められる能力等に関する追跡調査結果からの考察－